

▷第34回和GO懇話会

令和7年10月10日（金）パレスグランデールで、「第34回和GO懇話会」を開催しました。

お忙しい中、関係医療機関の先生方にご参集いただき、有意義に開催されましたことに厚く御礼申し上げます。

基調講演

『当院における骨粗鬆症患者のケアの実態について』

演者：看護部 丹野 亜紀子 看護師（写真左）

座長：桃井整形外科 院長 桃井 義敬 先生（写真右）



当院の骨粗鬆症患者ケアの実態について報告がありました。骨粗鬆症患者は全国で推計 1,590 万人いると言われており、当院では令和6年に391人の患者が骨粗鬆症と診断されています。また、当院には骨粗鬆症マネージャーが3名（看護師2名、薬剤師1名）在籍しており、FLS活動として骨粗鬆症のデータ収集、研修会の開催及び患者指導を行っています。

骨粗鬆症予防のためには、バランスの取れた食事摂取のほか太極拳やウォーキング等の運動が効果的です。そして、薬物療法（服薬や自己注射指導など）に関しては看護師と薬剤師が連携し、適切に行われるよう指導しています。ここで重要なことは、治療を継続していくことであり、中断を防ぐ取り組みが求められます。そのため、「健康健全な骨、転ばない体づくりのために多職種間で連携をしながら今後も活動を続けていく」とお話がありました。

特別講演

『理に適った脊椎外科手術とは何か？

—骨粗鬆症治療の新知見を含む—

演者：和歌山県立医科大学 整形外科学講座

教授 山田 宏 先生（写真左）

座長：笠原整形外科 院長 笠原 慎逸 先生（写真右）



「理に適った脊椎外科手術とは何か？ -骨粗鬆症治療の新知見を含む-」と題し、優れた医師に求められる条件や医療人の進むべき姿勢についてお話をいただきました。はじめに、「理に適う」ということは名医に求められる条件であり、知識、技術、経験、洞察力、物事の本質を見抜く力が重要であるとお話いただきました。

次に症例紹介があり、円背で硬膜外ブロックを施されていた患者の症例では、画像診断のみで対処せず、適切かつ丁寧に診察をしたことにより、患者様から「初めて診察してもらった」という言葉が聞かれ、結果的にそれまで見つかっていなかった原因が特定されたために手術で症状が改善しました。このことから「木を見て森を見ず」、「病気を診て身体を診ない」状態になっていないかを若い医師に伝え指導されているとのことでした。腰椎変性すべり症の症例では、ガイドライン上は固定手術が推奨されるものであったものの、症状が腰痛に限定される状況であったため、ブロック注射で改善した症例が紹介されました。また、加齢変性による椎間孔外狭窄の症例では、画像上は問題がなくとも症状が発生している場合があり、加齢をきたした病的腰椎においては健常人では有り得ない神経根圧迫があることが紹介されました。これらを踏まえ、「ガイドラインにも常に疑問を持って臨むことが大事である」とのお話をいただきました。

さらに、和歌山県立医科大学初代学長・古武彌四郎先生が卒業生に贈った言葉として「本も読まなくてはならぬ。考えてもみねばならぬ。しかし凡人は、働かなくてはならぬ。働くとは、天然に親しむことである。天然を見つめることである。かくして、天然が見えるようになる」という、医療人が進むべき姿勢が示された言葉をご紹介いただき、働くことが重要とされる背景として、「知識や理屈だけでは到達できない、現場という”天然”を通して初めて得られる真の理解と洞察がある」という哲学があるとお話をいただきました。

